

進藤雄三著

## 『近代性論再考——パーソンズ理論の射程——』

世界思想社、二〇〇六年、四六判二四〇頁、二〇〇〇円＋税

これからのパーソンズ研究は、ハーヴァード大学古文書館の未公開資料を使わなければ仕事にならないだろうとほめかす人もいるが、本書を読んで、そうでもないことがわかった。未公開資料を自在に使えないというハンデイにもかかわらず、著者は、独自の新しいパーソンズ像を提出している。

「産業化」あるいは「近代化」された社会は、弱点のない安定した堅固な社会というわけではなく、常に構造的脆弱性をうちに抱えつつ、一步一步足元を確かめながら進まざるをえない社会である。(にもかかわらずパーソンズは、社会の進化の方向を見通すことは可能である、また、社会に秩序は存在する、と考えていた。)パーソンズは右のような社会観に基づいて、彼の社会理論を展開した。

「近代」の堅固面と脆弱面の両面を強く意識しながら、社会理論を構築したというパーソンズ像は新鮮である。「近代」

の揺るぎなさを信じていた理論家のイメージが、パーソンズにはつきまとっていったからだ。このような新しい理論家像を、著者はたとえば彼のナチズム論から読みとってくる。

近代化がもたらす構造的ストレインは、すべての近代社会の深層に位置しており、ナチズムは構造的ストレインに対するノスタルジックな反応としての政治的動員である。その意味でパーソンズはナチズムを対岸の出来事ではなく、「内なるナチズム問題」としてとらえていた(二四―二五頁)。近代とは、ゲゼルシャフト化とゲマインシャフト化が対抗しつつ同時に進行するプロセスであり、したがって「近代社会」は同質的均質的な社会ではなく、構造的ストレインが組み込まれている多面的複合的な社会である。それゆえ、成員には逃れがたくアンビヴァレンスが刻印されている。そのような社会では、伝統的社会への「ノスタルジア」、また「原理主義」が絶えず再生産される(二五―二六頁)。(構造的ストレインを緩和する領域として、「適応構造」の概念をパーソンズは理論化した。著者はこの点を高く評価している。)

ナチズム論、マッカーシズム論の他に、パーソンズは資本主義―社会主義という二つの体制を、宗教的観点から読み解くことよって(カルヴィニズムとマルクス主義の類似性)、近代社会の二つの(いわば対等な)ありようと位置づけている。パーソンズは、近代の脆弱性と全体主義的動向(「近代性」への挑戦、二九頁)とを常に結び付ける視点から、

近代をとらえている。

このようなパーソンズ像は、「保守的・静的理論家としてのパーソンズ像を破碎する」(二〇六頁)ものである。

著者によるパーソンズ近代社会観のキーワードをいくつか書き出しておく。「構造的ストレイン」「近代性のアンビヴァレンス」「脆弱性」「秩序成立の危うさ」「調整(すべき)課題」「異質要素の両立という課題」(二六七頁)など、多彩な用語が使われている。「近代性のプロブレマティク」<sup>①</sup>がこれらの諸概念を総括している。

「多次元性の強調」(アレグザンダー)、「地上における神の王国の実現」(高城和義)、「社会学のチャーターの作成者」(カミック)などのパーソンズ像と並んで、著者の「近代の入り組んだ問題」を凝視し続けたパーソンズという造形は、今後多くの研究者が言及するものとなろう。

ただ、「構造的ストレイン」「構造的アンビヴァレンス」「不安定性」(二三三頁)などの用語が、整理されないまま頻出するという印象が残る。例えば「構造的ストレイン」は、『新社会学辞典』によると、もともとはスメルサーの集合行動論における用語と説明されている。「アンビヴァレンス」は行為者レヴェルの使い方が主流ではないだろうか。「構造的アンビヴァレンス」は、アンビヴァレントな行為を誘発する構造のことをさすのであれば、説明が必要であろう。「ストレイン」「近代社会の脆弱性」について、ところどころに説明

が散見されるので、著者が使っている意味は理解できる。しかし一連の概念をある程度まとめて整理したうえで、要約的な短いフレーズを使うほうが効果的だろう。(既発表論文を基に本書が編まれたという事情も影響しているようだ。)

著者も記しているように、「プロブレマティク」でいわんとするところは、他の研究者もすでに取り上げている。油井清光(二〇〇二)はこのモチーフを繰り返し強調している。「近・現代社会のヴァルナラビリティ」という主題が、パーソンズの生涯の『状況の定義』である(油井、二二二頁)。

高城和義(二〇〇三)は、ウェーバーによる社会分析をパーソンズがどう引き継いだかを検討する中で、「近代社会の不安定性」(七三―七四頁)などの表現を使っている。

「近・現代社会のヴァルナラビリティ」(油井)も、「不安定さを抱えた近代社会」(高城)も、本書の「近代性のプロブレマティク」も、ほぼ似た問題を指摘している。今後このモチーフが重要なテーマとして浮上する可能性がある。

三人の中で「近代性(modernity)」という名詞形を使っているのは、本書の著者だけである。この用語は著者も明記している通り、B・S・ターナーらの先行研究に負っている。

異質な社会領域ないし原理的価値が並存することから、近代社会は「緊張」「脆弱さ」を内包し常に調整を必要としている。これを著者は「近代性のプロブレマティク」と呼ぶ。

パーソンズはどのようにしてこの問題に気付いたのか。十九世紀末から二十世紀初めのヨーロッパにおいて、この問題が姿を現わし、それを認識する社会学者たちが出現した。彼らの問題設定をパーソンズがアメリカに移植し、アメリカ型近代の中で（アメリカはある時期以降、ポスト近代を實現したと書かれている）再考した。その過程で彼は、過度のペシミズムを払拭した。彼はヨーロッパ社会に対して余所者であり、アメリカ社会に対しても、距離をとることのできる立場にいた。著者はパーソンズを、二つの世界を架橋した文化的媒介者であると考えられている。（進化的普遍体）を構想し、「秩序は存在する」と言い切るパーソンズ。「近代性のプロブレマティーク」を凝視するパーソンズ。この二側面がどのように並存するに至ったか、込み入った問題と思われる。）

「近代のプロブレマティーク」モチーフを掘り起こすための仕掛けは、こつたものになっており、分量も多い（第二章、また三章も）。基本的枠組みは、「近代―ポスト近代」である。主に六〇〜七〇年代にパーソンズ理論に向けられた批判を著者が分析し、パーソンズ批判は概ね「ポストモダンと総称される言説」（六三頁）に属していたとまとめられている。

しかしパーソンズほど、「モダンを理論化し、社会学理論とモダンの関係を……一貫して追及した」（七六頁）アメリカの社会学者はいない。パーソンズは近代に対して距離をと

った観察者の立場にあり、「近代の脆弱性」問題を対象化し理論化することに成功した。パーソンズは「ポストモダン」の言説と意外にもそれほど遠く隔たっているわけではない。パーソンズ理論には「ポストモダン」の視点を先取りしていた側面もある。パーソンズ理論の今日的意義をくみ出すことは可能であると著者は考える。（近代のプロブレマティーク）は、「近代―ポスト近代」という背景構図と再構成手続きを経て初めて言語化される主題なのかもしれない。）

著者は「ポスト近代」を「近代」の延長線上でとらえているが、「ポスト近代」の特徴づけは、揺れ動いている（当然「近代」の定義も）。眼についたところを抜き出すと、「大きな物語への懐疑……」（三九頁）、「……ポスト・フォーディズム」（六四頁）、「国民国家の縮小、リスク意識の増大、グローバル資本主義……」（九八頁）などの引用表現が並んでいる。「近代―ポスト近代」という枠組は、言葉が何層にも塗り重ねられてデッサンされている（著者の論述スタイルの特徴）。そこからのようなイメージを膨らませるか、読者に委ねられている。しかし、「ポスト近代論」をまとめて整理紹介したうえで、「近代性のプロブレマティーク」に進む構成をとる方が、わかりやすかつたろう。

著者の「近代性のプロブレマティーク」を中心にしたパーソンズ像の再構成は、パーソンズ理論の批判派との関連では

どのように解釈されるか。パーソンズに対する誤解を解こうとする立場である。批判派が基づく考え方のものは間違っていないが、批判派のパーソンズ理解には誤解がある。パーソンズ理論を丁寧に分析すると、その誤解はとける。パーソンズ逝去直後にみられたような、擁護派と批判派の全面的な対決ではなく、批判派の見解を十分に取り込んだ上で、パーソンズ像をその方向へと移動させる、という戦略である。こうして、パーソンズ理論再生の手がかりをつかむ。「構造機能主義」のマイナス・イメージに染まっている世代の（評者のような）社会学研究者には、本書の一読を勧めたい。

「近代性のプロブレマティク」モチーフを引き出すために、著者はもう一つ間接的な工夫をしている。パーソンズの過剰な「図式的抽象主義」を批判し、「図式主義」の領域には立ち入らない。「最良の部分」が『図式主義』のカテゴリーを介することなく提示される必要がある（一六頁）。分析の中心は「近代」をめぐるパーソンズの洞察におかれている。パーソンズの仕事を何から何までフォーローする必要はない。研究の焦点をどこに絞るか、重要な選択だ。「図式主義」に関する説明を断念することによって、「近代性のプロブレマティク」という視座を引き出すことができた。ただ、「近代性のプロブレマティク」「構造的ストレイン」「異質なものの両立」などを整理するうえで、AGIL図式を活用する

余地が残されているかもしれないとも思った。

第一～三章では「近代性のプロブレマティク」主題が、「近代―ポスト近代」構図の中から抽出されてくる。そこまでを総論とすれば、その章以降は各論である。第四章「パーソンズ社会学理論の構成的契機」では、「ウェーバー問題」「秩序問題」「ナチズム」「専門職」「宗教」「共産主義」「進化論」「進化の先端的範型としてのアメリカ」などが扱われ、パーソンズ理論の今日的意義が丁寧に論じられている。

「あとがき」に著者の個人的経歴とパーソンズ研究の接点——医療社会学から研究生活を開始し、大学では家族社会学を担当した、それらの経験を生かしながらパーソンズ研究を続ける道を模索してきたこと——などが書きとめられている。

著者の経歴は、第五章の「医療」論、第六章の「家族」論で生かされている。これら二つの章が続いて配置されることは、著者ならではの構成である。「近代性のプロブレマティク」に関する著者独自の見解が提示される二つの章でもある。二つの章を、総論との関連を強調してまとめておく。

近代社会においては、「責任からの逃避」欲求、より一般的にいえば、「逸脱」への動機づけが潜在的に遍在している。これは、職業領域において「業績性」要求のプレッシャーが個人に継続的に負荷されること、つまり「構造的ストレイン」

によるものである。これに対しては、「ゆるやかな社会的コントロール過程」が作動している（一三三頁）。ゆるやかな社会的コントロールの中に、宗教・魔術・二次的の制度としての若者文化・ギャンブルなどと並んで、「医療」が位置づけられている。パーソンズ医療社会学の出発点、「病人役割」は「責任と役割義務の免除」「回復する義務、医療専門職と協力する義務」の諸要素から構成されている。この点にすでに、逸脱と社会的コントロールというテーマが明らかになっている、と著者は分析している。（病氣と「責任からの逃避」欲求を結び付けるのは、フロイトの影響をパーソンズが受け入れているからである。しかし、一般読者には違和感が残る箇所でもある。「逃避」欲求は病氣の原因の一つなのかどうか、「逃避」欲求が原因とならない病氣がある場合、その病氣と「逃避」欲求の結びつきをどう考えるのか。）

医療を主題化するルートとして、著者は「専門職論」と「逸脱への動機付けと社会的コントロール」との二つを指摘している。二つのルートの指摘には、鮮やかな印象を受けた。

近代化の過程すなわちゲゼルシャフト化の進展によって、職業領域における基本的構造が社会の前面に出てくる。他方、業績原理という主要価値と両立しにくい帰属原理は、家族の中に制度化されている。家族は、ゲマインシャフト的結合の象徴である。同時にまた、二つの傾向を調整する「適応構造」

でもある。第六章では、近代家族とその変容が論じられている。「近代性の構造的ストレーンが凝縮して沈殿する」ところが、近代家族である（一三九頁）。性別分業に基づいた婚姻関係が大きなストレーンを抱えていること、成人女性の役割が加重になりがちであり、その役割は揺れ動いていることなどが、パーソンズ自身の分析に沿って論じられている。さらに、社会構造の分化が進展すると、一般的に諸単位に課される課題が複雑化し高度化する。近代家族内部においても、個人に要求される課題が増大する。

パーソンズ家族論はなぜ批判され続けてきたか。象徴として標的となった、既存の近代家族を正当化しているとみなされた、近代家族の集団性・拘束性に対して、「個人化の進展過程」から析出された「個人」から異議申し立てがなされた、などの解釈が示されている。しかしパーソンズが近代の総体を照射していることと関連づけて、彼の家族論を再読すれば、今も訴求力を失っていないことがわかると著者は評価する。

以上のように著者は、「近代性のプロブレマティク」を凝視する理論家像を縦系にし、「医療」と「家族」を横系にして、説得的な議論を展開している。このようなパーソンズ研究のスタイルを作り出したことは、本書の収穫であろう。

以下では、残された論点を箇条書きにしておく。

(1) ウェーバーは「神の死」を認めていたが、パーソンズは

現代アメリカにおける宗派的(教派的)多元主義の傾向に注目し、宗教の枢要性を指摘した。パーソンズは、世俗社会のキリスト教化は歴史に一貫して持続する過程であると認識した。(パーソンズの態度は、自文化中心主義なのか、高い客観性に達した視点なのか。今後長く検討課題となろう。)

(2)「秩序はいかにして可能か」という問題設定から出発し、初期パーソンズはこれを社会学の課題とした。著者は、この論点にささいだが重要な修正を提起している。パーソンズはこの問いを、「秩序は存在する。このことはいかにして可能か」という問題に転換した(一七五—一七八頁)。

どのような観点(斉一性、調和など)からの秩序を、自文化中心主義と区別できる方法によって認識するのか。盛山和夫の用語を借りると、「一次理論」と「二次理論」の区別を明確にするという問題である(盛山、一九四頁)。この問題は重要であるが、論じだすと果てしない。そういう問題には立ち入らない、というのも、一つのいき方であろう(このような著者の研究方法を「方法的反煩瑣主義」と呼びたい)。(3)パーソンズは一方で「近代」の構造的脆弱性を観察しつつ、他方で社会に秩序が存在することを認識し、歴史の進行に一定の方向性があると考えていた。両面性を視野に納めるパーソンズの視点は、『永遠の相』のもとにおけるだけでも表現すべきものと述べられている(一八二頁)。このようなパーソンズの一種の「保守主義」を、著者は「哲学的」あるいは

は「超越的」保守主義と位置づけている。

しかし、パーソンズの秩序を見抜く眼力、樂觀的な進化論の構想力と、「近代性のプロブレマティク」への凝視とがどういう関係にあるのか、議論がなされていない。

『永遠の相』のもと」の視点は、盛山和夫のいう「二次理論」を構築できているということだろうか。そのような認識はどのようにして可能になったのか。しかし、著者は「哲学的」「超越的」保守主義という概念を提出するのみで、議論は停止している。著者の「方法的反煩瑣主義」が作動しているのかとも思うが、物足りなさが残るのは否定できない。

(二〇〇七年八月)

注①「プロブレマティク」とカタカナ書きされた英語の意味がわかりにくかった。辞書をみると、*problematique*(名詞)がみつかった。*problematique*の意味は、「(公害などの)入り組んだ問題」と説明されている。この点について、俵希貴さんに相談のついでにいただいた(『リーダーズ英和辞典』)。

②評者の思いつきに過ぎないが、(キリスト教的世界観に沿った)社会の進化をパーソンズは確信しており、その進化の路線からの逸脱をウオッチして整理する、という役割(神の道具?)を結果的に遂行していたのではないだろうか。

#### 参考文献

佐藤成基(二〇〇三)『パーソンズと社会学理論の現在』書評『ソ

シオロジ』第四八卷二号、一四四—一四八頁

盛山和夫（一九九五）『制度論の構図』創文社

高城和義（二〇〇三）『パーソンズとウェーバー』岩波書店

油井清光（二〇〇二）『パーソンズと社会学理論の現在——T・P

と呼ばれた知の領域について』世界思想社

（みぞべ あきお・金沢大学文学部教授）